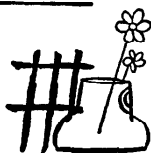


巻 頭 書



基礎的研究，実用・応用研究，利用の連携

立 花 佑 介†



今日、情報処理分野における発展はまことにめざましい。個々の企業では、技術開発、経理・事務処理、あるいはオフィスオートメーションといったそれぞれの部門における情報処理パワーの活用にとどまらず、多様化する消費者のニーズに対して少量・多品種生産に効率よく対処するため、受注から生産・出荷にいたるすべての工程を総合的に処理するシステムの開発・導入に積極的に取組みつつあり、ここでも情報処理の機能が重要な役割を果している。社会生活の面では、交通管制、地域気象観測、…など、いたるところでコンピュータパワーが活用されている。

こうした情報処理の利用は、産業界、行政はもちろんのこと医療、農業などあらゆる分野で進んでおり、家庭におけるコンピュータ利用にまで発展しつつある。最近では、コンピュータによる翻訳技術の開発も進められており、認識技術、知識処理などの飛躍的発展により、外国に電話して、日本語で不自由なく会話できるような時代の到来も夢ではない。

情報処理のあらゆる分野への普及発展をうながした要因は、情報化社会と呼ばれているように情報の価値が増大し、その高度かつ適切な扱いが大きな効用をもたらす社会環境にあり、また、技術革新によるコンピュータハードの低価格化、高度化、小型化が著しく促進されたこと、さらにオペレーティングシステム、言語、データベース、認識技術など利用技術の大きな進歩があったことなど種々考えられる。もちろん研究面では情報処理学会の果たした役割も極めて大きいものがあつたらう。いずれにしても情報処理の社会のあらゆる分野への普及・発展と情報処理学会の発展が表裏一体をなしていることは疑う余地のないものである。

これまでの情報処理の発展は社会の強いニーズに支えられ、これに応じて新しい研究・技術開発の成果を利用現場にフィードバックし、利用分野を一層拡大さ

せ、このことがさらに新しい研究・技術開発を促すという好ましいサイクルのなかで促進されてきた。

今後とも情報処理を一層発展させていくためには、研究と実用のよい意味での相互連携をより強めていくことが大切である。特に情報処理の利用分野を一層広げ深めていくうえで、まだまだ沢山の課題をかかえている。情報処理システムを利用する立場から一例をあげれば、われわれが日常使用している言葉、文字、図形などを直接コンピュータで扱うことの困難さ、あるいは、少し規模が大きく複雑に入りこんだ業務をコンピュータ処理可能なように設計するためにいかに膨大な労力を費やしていることか。こうした課題の解決のためには、新たに基礎的な研究が必要なものもあろうし、また、すでに研究され、確立された理論の応用、すなわち応用研究、実用開発の範囲のものもあると考えられる。いずれにしても、情報処理を実際に利用する現場ではこうした課題を沢山かかえているのが現実であり、これらの問題を一つ一つのりこえることにより情報処理の普及拡大は飛躍的に促進されていくこととなろう。

今日まで、情報処理分野における研究の成果を広く普及させるための活動は、情報処理学会においても、学会誌の発行、各種の研究会の開催、年2回の全国大会の開催などいろいろな努力が行われているが、前述したごとく、ごくあたりまえのことでも、人間の認識思考などの本質にまでさかのぼって追求する必要があるケースが多い情報処理の分野では、今まで以上に、基礎的な研究、実用・応用研究、さらに、これらの成果を具体的な利用分野に反映させていくことの三つを有効に結びつけていく、いわば三位一体の視点を重視していくことが極めて大切なことではなかろうかと考える。

(昭和62年10月6日)

† 本会理事 日本電信電話(株)データ通信事業本部